



ほ 多 当

建設的な生き方へのお手伝い (Just do it !)
(カウンセリングのことは当社までお問合せ下さい)
【今月の一冊】 世界一働きたい会社を創ろう！
マーク・M・ムネヨシ 著 フォレスト出版
ホームページ URL <http://www15.ocn.ne.jp/~prime21/>

発行日 2011年5月1日 Vol.103
発行元 有限会社プライム・コーポレーション
代表取締役 渡 邊 敏 徳
〒401-0015 山梨県大月市大月町花咲 147 番地
TEL 0554-22-2810 FAX 0554-22-2859

二宮尊徳の教え

二宮尊徳は、江戸時代後期に「報徳思想」を唱えて「報徳仕法」と呼ばれる農村復興政策を指導したことで知られています。私たちの身近なところでは、小学校の校庭に二宮尊徳像があることではないでしょうか。一般には尊徳「そんとく」と読んでいますが、正式な読みは「たかのり」だそうです。通称はご存知のとおり金治郎です。

彼の農村復興案の根本は、領主も農民も、ともに身分相応に節度を守ることにある。農民は勤儉に励み、領主は農村の再建ができるまで年貢を減らします。農民は年貢を減らされた分だけを払ったものとして積み立てるのです。これを農業施設の整備や営農資金に貸し出して活用していきました。

その生涯において620ヶ所の町村の財政再建を成功させ、多くの農民たちを救い、藩の財政立て直しに貢献したと言われています。二宮尊徳の再建事業は、まず人の心に種を蒔き、人の道を教え諭すことから始めました。農民の心に「道徳力」を高めながら経済再建を果たしました。

12歳で父を、14歳で母を亡くし、叔父の家に預けられると、寝る間も惜しんで読書をしました。百姓に学問は不要といわれた時代で、油代がもったいないと叔父に言われると、友人から一握りの菜種を借りて荒地を耕し種を蒔き、1年後には150倍の菜種を収穫。それを灯油に替え、燃やして勉学を続けました。

二宮尊徳が教えた人の道、経済自立の道は、経済と道徳を調和させる実践哲学であり、「報徳仕法」の根本は、「至誠」にあるとし、その上で「勤労」「分度」「推譲」が基本だとしています。

この二宮尊徳の教えは、今の日本にとってとても必要な考え方なのではないでしょうか。個人の生き方、会社の経営や国づくりにもいえることだと思います。

実際に寒天の製造で有名な、長野県の伊那食品工業株式会社では、この二宮尊徳の考え方を経営に取り入れており、48期連続増収増益を続けています。東日本大震災で大きな痛手を負った日本の復興には、私たちの生き方を見直すことを第一とし、次に先人の教えを参考にして、未来のあるべき国づくりを創っていく事が重要だと感じます。



遠きをはかる者は富み 近くをはかる者は貧す。
それ遠きをはかる者は百年のために杉苗を植う。
まして春まきて秋実る物においてをや。
故に富有なり。
近くをはかる物は 春植えて秋実る物をも尚遠しとして植えず
唯眼前の利に迷うてまかずして取り
植えずして刈り取る事のみ眼につく。 故に貧窮す。



(二宮尊徳)

【報 徳 仕 法】

- ・「至誠」…まっすぐで思いやりのある心、真心。
- ・「勤労」…人は自分に備わっている徳を最大限に発揮して働くことにより、生きる糧を得て生きていくことができる。
- ・「分度」…自分が置かれた立場や状況を踏まえ、それに見合った生活をするのが大切。そのためには自分の収入に応じた生活基準(分度)を定め、その範囲のなかで生活できるように節約に心がける
- ・「推譲」…分度を守ることによって余財を生み出し、それを家族や子孫のために貯えたり(自譲)、広く社会のためや未来のために譲る(他譲)。そうしてこそ幸福な社会が実現できる。
- ・「積小為大」…小さな努力の積み重ねが、やがて大きな収穫や発展に結びつく。小事を疎かにして、大事を為すことはできない。
etc